

未来のため「タイム・ホライズン」を意識する

一般社団法人 洗楓座
一般社団法人 e f c o . j p

代表理事 佐藤建吉

▼タイム・ホライズン

「未来」は、未だ来ない何か、未だ体験していない何か、を指している。似た「将来」は、将来になるものであり、未来よりは手前のごようだ。一方、「過去」は過ぎ去ったことであり、体験の中になる。「バック・トゥ・ザ・フューチャー」という言葉は、目ではなく、背中から未来に向かうことを意味する。未来は未知であることを意味している。「タイム・ホライズン」という言葉がある。「時間の地平線」であり、水平線や地平線と同じく、どれだけ先まで、時間的に見渡せるかということを指している。794年は平安遷都で、1994年はその1200年記念にあたり、日本未来学会は、2日間のシンポジウムを1993年に東京で開催した。未来学を提案する栄久庵憲司氏、小松左京氏、川喜田二郎氏（いずれも故人）らが座長やパネラーとして1000年後を予測できるかの試みであったが、残念ながら1000年先を展望する成果は得られなかった。

▼「21世紀の予言」

1901年1月2日と3日号で、報知新聞は1000年後を予測して

『二十世紀の豫言』を掲

載した。Ⅱ 画像
同記事では23項目について予言しているが、その内12項目が実現し、5項目が一部実現し、6項目が未実現であるとしていると、文科省・科学技術白書（2005年）が評価している。自動車輸送、高速鉄道輸送、電話・FAX・インターネット通信、ネットショッピング、エアコン、先進医療など生活・暮らしの面について予言的中している。人と獣との会話、暴風雨の鎮静化などは未実現といえる。

▼持続可能な未来

さて、今日では、100年はおろか50年先も見通すことが難しくなっている。国際化やICTの進展で現代社会が多様化し、変化が激しいことがその理由にある。ゆえに、タイム・ホライズンも短くなっている。次世代を担う若者たちも長期的展望を取りづらくなっている。

再生可能エネルギーの

再生可能エネルギーのFII（固定価格買取）制度は、基本的に20年の期限付き制度である。これは科学技術製品が対象でもあり、筆者は盤石な制度となることを期待している。未来を考えるには、さらにその先を展望しなければならない。



報知新聞紙面（明治34年1月3日）『二十世紀の豫言（二）』

▼22世紀のデザイン

筆者は、所属する法人で、「22世紀をデザインする」という社会講座を組み立てている。今年秋、11月の開講予定であり、「この先の時代」を考えることテーマとしている。

2014年、「22世紀

学会」という同好会で講演を依頼されたことがある。学会名にふさわしいものと考えて講演したのは、イギリスのエンジニア、イザムバード・キングダム・ブルネル（Isambard Kingdom Brunel、1806年～1859年）について。彼の人物

と実績を紹介し、未来視

感について語った。ブルネルは19世紀のイギリスのエンジニアで、その実績は21世紀の今日も生きており、まさに200年以上もの先を見据えた事業企画や設計を行った人物である。

イギリスでは、ブルネ

ルを誰もが知り、誇りに思っている。2012年のロンドンオリンピック&パラリンピックの開会式ではブルネルに扮した俳優が登場し、イギリスの産業革命の黎明と発展、そして影響について、象徴的な演出が行われた。

0年先を見据えたエンジニアリングや社会構築の価値を学ぶことが出来る。▼意識改革と対策へ向けて

22世紀がやってくるのは遠い先ではなく、85年後であり、孫の世代は体験する。「持続可能性」という言葉は、22世紀を意識すると、身近になる。その時代をデザインしなければならない。

JR東日本は2007年、「ぎのうのすこいを、あしたのふつうに」というコピーをつくった。講座「22世紀をデザインする」もこれに合致するもので、持続可能な未来のために、ひと・もの・こと・かね・ちいさ・くらし、などをキーワードとし、過去・現在そして将来や未来における新しい常識やふつうを展望する。

もちろん、エネルギーも主要なテーマである。22世紀のエネルギーは、どのようになっているだろうか？ 燃料電池や水素エネルギーが、ふつうになっっているであろうが、そのとき代替エネルギーといわれる新エネルギーもあるのかもしれない。いま、まず大事なことは、22世紀を意識し、タイム・ホライズンとして見渡し、顕在化している地球温暖化に向けてバックキャストし、喫緊に対策することである。